

## 電子書籍は“本”なのか？

図書館長・看護学部教授：穂坂明德（2013年5月7日）

メディアのデジタル化技術の進歩は、実に日進月歩である。さらにメディアの情報発信はインターネットの急速な普及でグローバル化している。東南アジアのホテルに宿泊した時につけたテレビから、ポケモンやドラエモンなどが画面に突如（？）現れたりして、おやと驚かされたり日本を離れていても同じだなという安堵感（!？）をもった経験がある。

いまやアニメやマンガは日本発のポップカルチャーの一翼を担っている。人類は印刷技術の発明により書物の文化を長く築いてきたが、現代のデジタル技術はメディアそのものの革新とサービスの多様化を急速に進歩させた。アニメやマンガの隆盛をみると、もはや書物の世界は中高年の少数派でしかないのか。実はこの問題は結構奥が深い。メディアとしての本や新聞・雑誌とスマートフォンやiPadなどの持つ特性の違いの問題であり、メディア論的に言えば活字文化とデジタル映像文化の差異である。

では近年注目され、広がりを見せる「電子書籍（ブック）」はどうなのであろうか。電子教科書の構想までが各国で検討されている動きもある。電子書籍の登場は、著作権概念や出版流通のあり方に大きな変化をもたらすばかりでなく、これまでの紙に印刷された本の特性を超えて将来の知のあり方にも影響大である。本と電子書籍ではどちらが便利かという機能性ばかりに話題が向くが、集中してじっくり本を読む行為を通して得られる脳内思考作用や想像力の豊かさなどは、はたして電子書籍から同等に得られるものなのか。専門家によれば、モニター上の文字はドットの集まりであり、それを頭脳は識別し、解読することにエネルギーを多く費やしているという。文章の内容理解の前に頭脳の演算能力が消費されるために、文学性や表現性を味わうことなどは二の次になるわけである。ところで日頃めったに本など読むことのない人には、そもそもこうした問い自体が問題外なのも考えさせられる問題である。